

昭和66年(頁)1日第3種郵便物認可
平成15年(頁)1日発行(頁)1日発行
発行所 沖 第24巻第5号

俳句雑誌「おき」

沖

9
月号

沖
発
行
所

親子滝

林 翔

雲処先生の易

親 滝 は 叫 び 子 滝 は 眩 ける

底 見 せ て 川 は 流 る る 河 鹿 笛

鷗 来 よ わ が 胸 に 来 よ 夏 陽 陥 つ

白 南 風 や ま し て 渚 の 真 白 波

東京開成中学校で漢文の講師だった新田興先生が国学院大学講師でもあることを知ったのは、卒業の少し前であったかと思う。私は国語教師を志望して国学院に入ったから、引き続き新田先生の漢文の授業を受けることになり、その縁で奥鴨の新田家へは屢々伺った。先生は有名な酒豪なので、時には酒肴のご馳走にあずかることもあった。

先生は雲処または雲処学人と号して漢詩の大家でもあった。また易学をも修め、教員になる前は大道易者だった由。それが何かの機会に枢密院議員某に認められて、教職に就くようになったのだという。枢密院は戦後廃止されたが、天皇の顧問機関で、その議員の権威は高かった。

或る日、お酒のご馳走になりながら話が弾んでいた時、「林君、手相を見てあげよう。」と「言われ、右手を差し出した。先生はじつと見

梅雨霽れむ遠白波の存在感

舟虫のもぞりもぞりや岩乾く

黒鯛あはれ魚槽を終の栖とし

若き日を食らふが如しさくらんぼ

静脈の浮き立ついのち梅雨深む

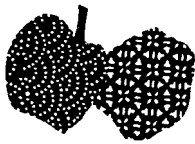
明日は明日梅雨鯛に埋没す

据えて「いい手相だ。」と言われた。詳しい事は覚えていないが、「長生きするぞ。」とも言われたように思う。

戦争も四年目に入り、大本営発表は勝報だけだったが、開戦当時の勢いは無かった。或る日、新田家の客間で先生と向かい合っていた時に「日本は敗けるよ。」と先生が言われたのに驚いた。枢密院議員の有志に漢詩の指導をしておられた先生は、その筋から情報を得られたのだと思う。

翌年、巢鴨の新田家も駒込の林家も空襲で全焼した。やがて終戦。そして私は先生の占いの通り、よい運勢に恵まれ、長寿を保っている。

林
翔



孤高立

能村 研三

神代植物園

日に向きて蓮一茎の孤高立

池の面へ扇日覆の接写かな

石田波郷墓前

訪ねあて師系づたひの墓洗ふ

花野行く男の影は澄みしかな

軽井沢の夏

今年は、八月に入っても余り気温が上がらず、景気の悪さと相俟って何となく淋しい夏だ。

文化会館はお盆にメンテナンスを行うので、思いがけずまとまった休暇をもらった。本当はこんな時こそじつと家において仕事をすればよいのだが、やはりじつとしてはおられず、家族の中で都合がつくものと一緒に軽井沢へ出かけることにした。

軽井沢へ行く理由の一つに、山荘で静養中の詩人、宗左近さんを訪ねることであった。宗さんの山荘には四年前にも訪れたことがある。

今回は、市川市との文化交流の足がかりをつけるため私が八月にスウェーデンに行くことになったので、渡欧前にスウェーデンの文化事情に詳しい宗さんから話を伺うことが目的であった。

宗さんはストックホルム大学の日本語学科で教鞭をとっておられたことがあり、親日家の多いこと、俳句も盛んであることなど語って下さった。

ところで軽井沢は子供が小さい時から、北軽井沢のコテージを借りていたが、今年もそこを予約した。

周辺の観光スポットは、殆ど行っているので、「軽井沢高原文庫」の

踏み入りて花野の起伏厭はずに

磯小屋の大謀網へ月明り

風あれば萩の量感楽しめり

鳥渡る書架にまだある工学書

繋柱は潮錆びてをり野分立つ

糶後に魚鱗がひかり涼新た

「谷川俊太郎展」と「浅間縄文ミュージアム」で開催している「武満徹展」を見に行った。

谷川俊太郎も武満徹も、こちらに山荘があり、親密な交流があったようだ。一つのジャンルにとらわれず、詩人、作曲家、作家などの交流があり、それがお互いの創作活動の領域を広げる結果ともなっている。

軽井沢には他にもたぐさんの文化人の山荘があるが、東京の喧騒を離れて、少しタイムスリップをした時間の中で、真の心の交流ができるのだろう。

能村研三



蒼茫集



団欒の灯

上谷昌憲

団欒の灯に似て咲きし落花生
蛞蝓わが光陰の忸怩たり
変哲もなき瀬を去らず鮎釣師
ごきぶりの考へてゐる刹那かな
川面より低き横丁浮いてこい
保育所の窓かうかうと蚊喰鳥

黴の華

河口仁志

朝からの雨の致死量濃あぢさゐ
誰彼と愛想鳴きして羽抜鶏
明日侍む梅雨夕焼に佇ちゐたり
手を出さば発火しさうな黴の華
梅雨出水牛舎の蠅の溺れゐる
夏至今日と思ひつ仰ぐ昼の月

みな先に

川島真砂夫

みな先に逝つてしまひぬ昼寢覚
世の果てのやうな土砂降り十葉咲く

麦秋の全景にまた一戸減る
頭を撫でて子をさとしをり麦の秋
あし裏に大きな黒子昼寝海女
かなかなや誤字多かりし母の文

オホーツク海

工藤節朗

蝦夷の地の滝壺はオホーツクの海
闘牛の角組み解けず雲の峰
くしけづる流れのひかり水芭蕉
垣を結ふ紐になりけり鉄線花
チャグチャグ馬コ天地に鈴を奉り
殉教のこ糸をつつみし竹落葉

はじめての闇

藤原照子

菜園に苺実らせ病まれけり
投函の悔や安堵や沙羅の花
深梅雨や一步に噎せるワイン蔵
うすうすと四囲に名の山螢とぶ
はじめての闇との出合ひキャンプの子
一瞬は魚になりきるダイヴェイニング

潮鳴集



雨より速く

楠原 幹子

ところてん話して楽になることも

深田さんへ

鮎・トマトみな退院を待つてをり
キャンプの夜はりはりと囁む生野菜
雨の奥雨より速く滝落つる
四万六千日没日のあとの明るさに

梅雨晴間

坂本 京子

家ぬちの俄かに広し梅雨晴間
青田波遙けきものに目を凝らし
一の滝二の滝六腑透きゆくも
万緑や山の雄叫び聞くおもひ
贗作にそれなりの佳さ梅雨の蝶

虹の橋

武藤 嘉子

十葉を干して指先ねむれぬ夜
袖とほすことなき母の薄ごろも

遠郭公山の目覚めを清しくす
吾子おもふあの虹の橋渡りしか
一方通行はたと西日に突き当る

小 暑

大庭三千枝

浮雲の変り身速く芙美子の忌
夏つばめ湖の全景使ひ切り
鱒刺の抜き打ち水を汚さざる
言ふべきを言ふ香水に力得て
躓きし石を確かむ小暑かな

柿 若葉

宮坂 恒子

空つぼの胸は鏡や柿若葉
梅雨空へ御柱となる樹の靈気
草を刈る真昼ひとりの音をたて
緑蔭の風が招くよ入れとぞ
蠅を打つ時ほどの敵吾にあらず

沖作品



能村研三選

残心の青き尾螢火潤みけり

でで虫の歩み自愛の日をつなぎ

晩節は白くありたし夏椿

噴水のゆるびて向かうの景色かな

空蟬の風抱くかたち日暮れけり

父の日や子に遺したる道具箱

万緑を波に織り込む山湖かな

蔵の鍵暫し開け置く朴の花

せせらぎの音する星や螢の火

丁寧な暮らしの水や麦の秋

手に受くる泉の鼓動山開

たかむらに夜の降りてきし洗鯉

かじか聴く会へ河鹿の鳴きくれし

父の日の太き汽笛をあびにけり

七色の洗濯ばさみ巴里祭

風鈴や十指に余る転居して

思ひきり笑ひし涙夏芝居

千葉

富川 明子

長野

矢崎すみ子

東京

坂 ようこ

千葉

谷口みちる

降るとなき雨遊ばせて鉄仙花

道ひとつ違へて驟雨ふりかぶる

夜明け星白桔梗の黙を解く

川音は胸のさざ波螢の夜

十字路を使ひきつたる夏つばめ

野辺山の星のうるみぬキャベツ畑

屋上に車の埋まる雲の峰

日焼けして木綿のシャツのやうな人

夏燕一閃湖の紺緊まる

夏帯を締めてきつぱり嘘をつく

凄まじや盆地ころがるはたがみ

さりさりと魚捌かるる夏の月

おとがひで数ふ石段夏つばめ

思春期の素足まぶしく波追へり

海光に芭蕉玉解く番外寺

軋む櫓に藻屑のからむ半夏生

緑蔭や氣息ととのふ弓絞る

長野

高橋あゆみ

愛媛

渡部 義雄

愛知

柴田 近江

朝靄の深きに濡れて朴散華
若者の指の強さや青りんご
更衣負ひ目するりと消えにけり

市川市

内山 照久

徹の書の奥付にある定価かな

パソコンの目を休めけり深みどり
国中を動かぬつもり梅雨の雲

兵庫

柴田 英彰

光悦の鳥うたひだす杜若

半夏生荒砥に水の奔りけり
水打つて祭日和となりにけり

岩手

吉川 隆史

草いきれ男を強くする匂ひ

碧落の風知る百合の揺れ確か
鹿太鼓韻く一番庭の梅雨

滋賀

沢井 巨江

素語りの涼しげに聞く京座敷
夏帽子ぬいで素顔に戻るとき

酔ふことの楽しさ知らず祭鯉
青空の芯に切り込む長刀鉾

新潟

長谷川 春

しやぼん玉にも青雲のころざし
日や月や青梅つぶらに育ちをり

雨音のあつまつてゐる濃紫陽花
光茫はたんぽぽの絮空の青

市川市

栗原 公子

羅を着て強情をかくしけり
笑ひ声交じる遠忌の夏座敷

願掛けを忘れてゐたり二重虹

はつなつの貝殻骨を磨かねば
折からの風に雨意ある四葩坂
紫陽花の藍の深みに雨意きざす
海霧深き船をこばみし遠流の地
螢火に心灯されぬたりけり
抱卵の鴨の眼尖る双眼鏡
青梅雨や鳥影失せしサンクチュアリ
灯涼し木に還りゆく円空仏
動く歩道涼風域に入りけり

愛知

三好 智子

千葉

大沢美智子

新人賞予選句（九月）

噴水のゆるびて向かうの景色かな
父の日や子に遺したる道具箱
父の日の大き汽笛をあびにけり
風鈴や十指に余る転居して
十字路を使ひきつたる夏つばめ
夏燕一閃湖の紺緊まる
緑蔭や氣息ととのふ弓絞る
若者の指の強さや青りんご
半夏生荒砥に水の奔りけり
草いきれ男を強くする匂ひ

富川 明子

矢崎すみ子

坂 ようこ

谷口みちる

高橋あゆみ

渡部 義雄

柴田 近江

内山 照久

柴田 英彰

吉川 隆史

作品 評句後選

*
能村研三

噴水のゆるびて向かうの景色かな 富川 明子

都市空間を涼しげに演出する噴水、人間は水の風景を見て心が癒される。単に水を高く噴き上げるだけでなく、ライトアップの照明を合わせたり、いろいろな仕掛けで水の動きが演出される。噴水が目一杯噴き上げている時は、向こう側の景色も見えないものであるが、水の勢いが弱まった時、にわかに向こう側の景色が浮かび上ってくる。それも水に濡れたような涼しげな風景だ。噴水という一つのものだけを写生した句ではなく、映像の二重性のトリックを利用した手法がおもしろい。

父の日や子に遺したる道具箱 矢崎すみ子

この道具箱、鋸や金槌、釘、ドライバーなどが入った道具箱のことか。「工具箱」ではなく、「道具箱」と言ったところに、何か機能だけを重視するのではなく、大切に愛用していた道具をし

まっておく印象があつて何か温かい。子どもさんが小さいうちに父親が亡くなつてしまつたのか、家のちよつとした繕いをするのは家長の役目で、父親がいなくなつてしまつたからには、母親としては家の繕いの仕事も父に代わつて息子に期待をかけるのだ。父が大事にしていた道具箱を受け継ぐことによって息子の家長としての役割も増してきた。

父の日の太き汽笛をあびにけり 坂 よう子

俳句は多くを喋りすぎない方が良いと言われている。十二分に作者が喋つてしまうと、読者はその報告を受けただけで、想像する部分が無くなつて、何の余韻も生まれない。この句も喋ることを極力抑制したことで、「父」「汽笛」「太き」という言葉からある種の父親像がしっかりと浮かび上る。父は船乗りであつたのか、太き汽笛は今父の声として伝わつてきた。

風鈴や十指に余る転居して 谷口みちる

転勤族だつたのだろう。大きな会社だと、日本全国に支店や出張所があつてサラリーマンは辞令一つで転勤を余儀なくされる。本人はもとよりこれに付き合う家族の苦勞も大変だ。十指に余る転居というのであるから、コンパクトにまとめた家財道具を次の転居地まで運ぶのも慣れたものだ。そんな生活の時代も終わつて、いまでは転勤の苦勞が懐かしくも思える。軒に吊るした風鈴も何度私たちと共に転々としたことか。

(以下略)